

元和七年十二月二十五日

三七八

興尙切向、向廣韻曰、對也、窻也、會意曰、趣也、救也、集韻曰、鄉也、

○邦房親王、酒饌ヲ獻シ給フコト、慶長八年十二月十日ノ條ニ、二條城ニ家康ニ見ユル
トキ、准三后二條昭實ト禮ノ先後ヲ爭ヒ給フコト、同十六年四月二日ノ條ニ、邦房親王
妃薨シ給フコト、元和二年七月三日ノ條ニ、邦房親王、江戸ニ下向セラル、コト、同三年
正月二十二日ノ條ニ、伏見城ニ秀忠ニ見ユルトキ、前關白鷹司信房ト座位ヲ爭ヒ給フ
コト、同五年六月十八日ノ條ニ、一周忌ノコト、同八年十二月十七日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔花押彙纂〕

皇族

伏見宮邦房親王



前中友輔氏所藏文書(京都)

(文應元年)
六月七日附前田玄以回狀

御花押

御短冊

〔筆陳〕

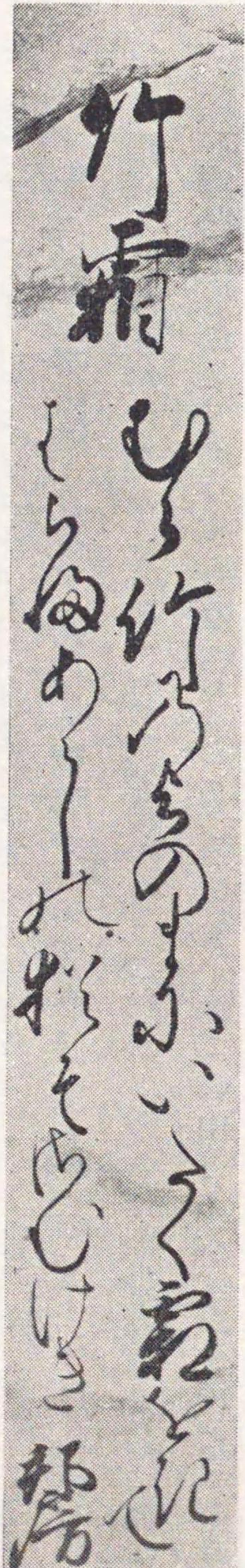
上

○保阪潤治氏所藏

竹霜

むら竹のよのまにいたく霜をきてはらふあらしの猶そさむけき

邦房



〔手鑑短冊〕

○伊勢長谷川次郎兵衛氏所藏

菊

春にみし梅より後にさく菊のまかきの秋もはなの色く

邦房

〔佐佐木信綱氏所藏文書〕

一

歸鴈知春

久かたの雲のうへよりのとかなる時をわすれす歸る鴈かね

邦房

〔邦房親王御詠藻類寫〕

○伏見宮御記
錄亨七所收

初春風

春の來る外山の風は長閑にてそらは霞のたちやそふらん

邦房

山霞

朝かすみたな引にけり大うちの山より春の色もゆたかに

邦房

堇菜露

春のゝに分つゆけはおく露にそてはぬれてもすみれ摘なん

邦房

元和七年十二月二十五日

三七九

御詠草

名所鶯 三吉のよし野の山も春の色にさそはれいつる谷のうくひす 邦房

早春雪 春きぬとふりつむ雪のひまそひて松のみとりも時をわくらん 邦房

初花 もらさしのめくみの雨にいとはやも咲そふ庭のはなを見るかな 邦房

十五夜月 二葉よりをひさきしるき春みえてねのひの小まつけふや引らん 邦房

月前鴈 こよひとや秋の寂中のかけ見せてそらはれのほる山のはの月 邦房

初かりのなきくるかたは雲のうへや月に聲する秋のよのそら 邦房

○邦房親王御詠、月に聲するノ右傍ニ、おもしろくそんし候ノ評語アリ、

龍田川もみちうつろふゆふなみの色をもよそにへたつ薄霧 邦房

けふまでと秋のかきりのかけ見せてひと葉のこらぬ木々のもみちは 邦房

住吉浦 住よしのほかハあらしな松にのみふり積雪の明ほのゝそら 邦房

〔此御哥、後之寄鏡雜なれとも、短冊ニ而慥ナレハ、本ノマ、ニ隨〕

尋戀 おもかけをなにゝみてまし朝ゆふにうつすかゝみのなき世なりせば 邦房

馴不逢戀 きぬゝのけさのなこりのこゝろをいはずはての山とふみにかよはぬ 邦房

〔此御哥、尋戀也、前之鏡之御哥ト顛倒ナレト、本ノマ、ニ隨〕

寄鏡雜 うはのそらにきゝつる風のたよりにておもふあたりや尋ゆかまし 邦房

〔朱書〕
右御短冊

詠百首和哥

邦房

春二十首

立春

十六日 東路や出る日かけもたつ春のけふのしるしと打かすむらん

霞

十七日 春日のゝかすみたなひく山風のけふより空の色そ長閑き

鶯

十八日 谷かけのふるすを出てこの比は千さとなるゝ鶯のこゑ

残雪

十九日 〇ふるとしの雪そのこれる松の葉にむらゝきえて春の寒けさ

野若菜

元和七年十二月二十五日

三八二

廿日 ○わかなつむしめしのゝ邊に打むれて行もかへるも霞袖かな

里梅

廿一日 ふるさとの春こそ雪にうつもれて木の間かすかにほふ梅かえ

簷梅

廿二日 うへをきしのきはの梅ハさきそめて汀に匂ふ春の夕かせ

春月

廿三日 春のよはかすみにこめて月影の光おほろにみゆる空かな

春曙

廿四日 あけほのゝ雲もかすかに春やきて花は霞に匂ふ山かせ

歸雁

廿五日 いくとも宿ハたつねむ天津空雲もはるかにかへる雁かね

春雨

廿六日 晴やらぬ雲もほのかに春雨のゆふくれちかく霞む空かな

柳

廿七日 青柳のいとゝみたれて浅みとりなひく雲るにはる風そふく

待花

廿八日 まつほとに日數は猶も立そひてわか木のはなハまた咲もせて

初花

廿九日 きふけふくれなるうつす色見えて木の間に匂ふ春の夕かせ

見花

卅日 けふハ猶花みてくらす山かけにほひそふかきはる霞かな

盛花

一日 さかりなるこの間のはなの色ゝにほひをけふと春かせそふく

落花

二日 けふよりやちり行花の木の間にハ雪とそみえしみよしのゝやま

款冬

三日 橋姫のころもの袖や山吹のなみたちかゝるうちのかはかせ

藤

四日 たちそひし岡邊の松のひまとちて色一しほに見ゆる藤波

元和七年十二月二十五日

三八三

元和七年十二月二十五日

暮春

五日 やよひなを春の日數も立そへてけふはかりにと花そ残れる

夏十五首

更衣

六日 散もせて春におくるゝ花のかをけふ立かゆる袖にうつさむ

卯花

七日 うの花の咲しかきねハ白雪の色もさやかに冬と見ゆらん

待郭公

八日 よひとにまちにしものは時鳥なかくらせる雲のはの月

聞郭公

九日 ほととぎすそれかとたとる一聲ハけふきゝそめしはつ音也梟

早苗

十日 五月雨のはれ行空に夕日さす山のをかへの早なへとるなり

橘

十一日 にほふらんふるき軒端の立花はたをるもおしき風そふきける

五月雨

十二日 つれくゝとふりにしけふのさみたれハ軒のあやめにしたふ音かな

夏草

十三日 露むすふまかきにたかき夏艸ハ深くそ見ゆる庭のゆふかけ

夏月

十四日 夏夜は夕立あとにかけさすや空すみわたる澄る月かけ

鵜河

十五日 大なる川鵜ふねさすよのかゝり火ハ水にそうつるかけの一むら

螢

十六日 ほたるとふ雲間をわけて行かけはわか身をてらす夜はそ物うき

夕立

十七日 すゝしさハ今一とをりゆふ立のはれ行雲に入日さす也

十八日 蟬

元和七年十二月二十五日

元和七年十二月二十五日

十九日 納涼

廿日 夏萩

秋二十首

廿二日 初秋 野月

廿三日 七夕 關月

四日 萩 橋月

五日 萩 浦月 虫 菊 鴈 擣衣 鹿 霧 秋夕 杜紅葉 秋田

河紅葉 山月 暮秋

〔朱書〕
右御堅詠草

三八六

詠三十首ノ
御和歌

詠三十首和歌

邦房

早春

澤春草

曉梅

春の來るやまのみゆきのうちとけてかすみそ四方の空にたなひく
ふねよする澤邊の清水かけすみのかとかにてみとりをうつす敷になひくはるのわかくさ
若草のなひく、あまりにとくしくや、
ふけく〜て夢もむすはぬあかつきのまくらにかほる軒のむめかゝ

花似雲

近頃珍重存候、

江暮春

四方の山にたなひく雲とみるかうちに花とやつくるはるの夕かせ
くれてゆくそらもやはんさすふねの入江にはるの敷もとまりありやと
是又珍重〜○邦房親王御詠二句ヲ
空もしたはんニ作ル、

溪卯花

柴とりて歸るかたへに日のおちて雪とやまかふたにのうの花
野をみ敷ひろき野にひとこゑき〜つほと〜きす過にしかたの雲もはるにりいかなるこ

野郭公

可然存候、

雨後鶴川

ゆふたちのあとはれわたる川みつにかゝり火多うふねさすらん
露をもきをきのうは風ふけすきて空すみわたる秋のよのつき

月前萩

あさちふのをくものふかきゆふくれにひとまつむしの聲そきこゆる
山ちかくうらさとつ〜く海士の家になれてそきなくさをしかの聲

海邊鹿

あれにける敷
みたれあふ庭のくさむらかたわけてかせをすかたの糸す〜きかな
閑の心、いさ〜か幽にや、

閑庭薄

擣衣
いくたひもたかさとよりかうちそめて月にきぬたのおときこゆらん
よりか、このか不好候、

元和七年十二月二十五日

三八七

朝寒蘆

あけすくる敷
なには江の

入江のあしのおれふしてかれはによする水のしら浪

深夜千鳥

ふかきよのねやのあらしの牙くくて川つらちかく千鳥なくなり

里雪

ひとむらのさともふもともをしなへて深雪になりぬけさのやまく

初戀

あひそめしと葉の敷のつもりきてあくるも知らぬにるまくら哉

忍戀

人目もるわかかよひ路のよなくにさやけき月のかけはうらめし

待戀

今夜こんと契をきつまつの戸をさしてそまちし灯のもと

逢戀

君と我かはせる文のかすそひてあふようれしきうたねの床

恨戀

うらみわひなみたにくちし袖のうへははらひかねたる露のしら玉

殊勝存候、

旅行

旅ころも野やまわけ行すゑとをみ日數つもりて袖やつるらん

旅宿

行くてたれをあるしとかりまくらかたしく夢の露そ身にしむ

旅泊

とまりふねかよひなれたる浪のうへにはの友とや月なかむらん

月なかむらん、不可然候、

山家松

かたふける家ゐさひしきやまさとにきそなれたるみねの松かせの聲

山家橋

おくふかき山のすみかのひとをりみえてそわたす谷のかけはし

山家苔

人とはぬやまのかたそに庵しめてこけにそむる杉の下下道ほ

寄竹祝

世々へてもかはらぬかけのすなほにてうてなの竹のすゑなひくらん

寄龜祝

たえせしな流ひさしき龜龜尾の毛の山山のいはねの水のしらなみ

寄神祇祝

神代よりかはらぬ色やさかき葉のかけにあとたれるふかふかりしりしみつかきの中

僻墨

十一首

大禮のまへ以外纏頭の事候へ共、應尊命候、少々加卑詞致進上候、頗以狼藉、且以天責至極候よし申給へ、

今出川
晴季

試毫

邦房

今日といへは御もすそ川の神かせもなかれのとかに春やきぬらむん王御詠ニ據ルハ邦房親

〔邦房親王御詠〕

○宮内廳書
陵部所藏

邦房親王御
詠歌

添削中院通
勝

同今出川晴
季

元和七年十二月二十五日

中務卿邦房親王御詠歌

添削

素然 中院中納言通勝也足軒

晴季 今出川右大臣

天正十五九月九日院御會院御點、

正親町院也、

同十三五月廿五日詠草御方御所御點、

後陽成院歟、

同十五十一月十三於禁裏右府點、

今出川晴季歟、

百首

邦房

池蓮

にこりなきかけをうかへて池水にさける蓮の花そ色そふ

此御詠、あそはされ候て可然存候、

いさきよきかけをならへて蓮葉の花にあまれる露の白玉

此哥に、池と申心なく候間、いかゞ可有候哉、

早秋

風の音もをく白露のいかにしてきのふけふかの秋をしるらん

いかにしてきのふにかはる風の音もをく白露も秋やしるらん

曉鳴

夢さめて枕に近きあかつきの門田の面の鳴の羽かき

此程相煩候、むさと申入候間、能々可被成御再覽候由申給へ、

素然

紅葉

花の後又くれなるのたつ田姫そむる紅葉もにしき成らん

古今に、花のちることやわひしき春霞たつ田の山の鶯の聲、たつ田にて

花をよみ候事、たしかにハ覺えす候へ共、如此候、此度不珍候歟、

時雨のみとみえしはを又色そふるとりく染る紅葉のにしきをや四方にてらせる夕日影かな

祈戀

元和七年十二月二十五日

元和七年十二月二十五日

三九二

きふね川ふかきえにしと頼むかな祈る心のとけん物ゆへ
初戀にふかきえにしの末たのむしり歟、

逢戀

夢とのみ思ひやはてんわかこゝろ逢瀬程なき身をし思へハ
思ひの字二御座候、

遠戀

見せはやな身はうき舟のかち枕波の行衛に遠さかるらん
何とも調法御座なく候、同じ詞とも指合候、今少御案なされ候やうに可預御取成候也、

素然

別戀

別れ行池のみなはのあたにしも歸らん程をしたひわふらむ
わかれての後の心の末つるにしたふもあたになりやはつへき
此哥共、何とも分別なく候、猶以頼存候、昨日出来候へ共、取に不被下候間、もたせ進上候、
残りの戀の哥、同事候ハぬ様に御思案可被成候由可預御披露候、

素然

増戀・偽戀の兩首、何とそ今すこし可被成御思案候哉と、可預御取成候、

素然

増戀

身にし今^{まさ}そふる思ひのしられつゝ夢さへうとき夜半の枕に^手

偽戀

いつはりのうきに涙のさそはれてたゝいたつらにくちん袖^{袖やな}かは

初春鶯

今朝よりは空のけしきもあら玉の春のかひある鶯の聲

尤可然存候、珍重く、

後朝戀

かたる間もなくてそあく^{けし}る曉のかね^{より後のつらき名残を}ハものうき別路にして
ひとつに別戀にて候、後朝、いさゝかよみやうかわり候事候、昨日終日まかり出候て、たゝ
いま拜見、急候て如此候、

元和七年十二月二十五日

三九三

卯花隠路

山人はこふ眞のこり行柴のかけ絶て道さきかくす木々の卯の花

柴こる、めつらしく候、薪こるやうにきこえ候ハぬ歟、なきにてハあるましく候、

○歳暮立春 若水ハ元日にかきり候歟、さやうに候

暮元日立春歟、てゆく年のこなたに万代の春をいそきてくめる若水

○くれはつる年の一夜をへたてなくあすをもまたて春や立らん

杜若

紫の色こくさくやかきつはた今一しほにみゆるゆふかけ

色こくと候て一しほ、いかゝ候へき、又ゆふかけ、ふとしたるやうに候、惣別一しほハ、め

つらしき心も候へ共、こゝにてハ如何候、二條公哥に、春ことに今一入の色そハ、松もむ

かしハ色なかるらんとよみ申候、御心得のためかきつけ候、よく御おほえ候へく候、

千鳥

さよふかくかよふちとりの聲聞ハ夢路わひしきすまの浦浪

淡路鳴かよふ千鳥のなく聲にいく夜ねさめぬすまの關守 明哥候、第二句同前、又三句

に聲候て、むすひ句順序にて候、かやうの事、詠哥大概に、一段といましましめられ候、ことに
千鳥などにてハ、中々無勿躰候、

頃日興門連哥候而御使之由、昨晚承候、抑先日不存寄御帷一重拜領、忝儀候、近日必致祇候
可申上之旨、御取成所仰候、頓首、又々被仰聞候、

初秋 世是野 拜

星夕詠今宵織女渡天河和歌

中務卿邦房親王

年ことにけふのこよひの天河あふ瀬たえせぬ妻むかへ舟

子日

阿古丸

姫小松みとりそふらん子日して神にまかせん君かよはひを

霞

八重霞吹くる風のひまもれてになひきつゝ色かさねてなくひはりかな

此哥を御なをし候て給候へく候、しゆうなから、かきつけ候てさし上候、何もよく申給へ、

晴す急上

名所松

いとくも
としをふるおなし縁に立そひてこたかくみゆる住の江の松

よろつ代のねさしとめて住の江の岸にこたかき松風の聲
松のちとせとこそ申ならし候へ、うちまかせてよろつ代と候へき事、いかゝにて候、此
分にて御心にあひ候へ、下かきをしてまいらせ候へく候、以上、

家々七夕

家ことに手向の絲のしらへをやとしに一夜の七夕の空
今夜しもしらへあひあふ七夕は家ことにきく絲竹のこゑ

家ことに花そめ衣手向れたちいてハ別れになりぬ明ほの袖

いかゝ御坐候はん哉、いかやうにも御なをし候て可給候、

毎秋愛菊

九重にこのかさねのきせわたもたえせぬ秋のしら菊の花

此間如仰候はうとくしく存候、然者明日の愚詠御覽候て可給候、我々御之由、御養性專一候此中目煩申候上、又物ま

てつき候て、散々の事候間、以他筆申候、如此候故、先度御法事にも不參申候、遺恨申候以面諸事可

申候也（返状ノ末）このよし申給へ

晴すゑ

寄花恨戀

中くに何うらみまし心なき花は岩木の春とおもへハ

此御詠も、始終ともに無分別候、返々何と吟候ても、無分別候、ひはん可進やう無之被存

候、

月照菊花

色もかをもいまみるくはたそふや夕くれの籬ハ月のしら菊の花

此、御詠にて候歟、

納涼

涼影あつきしくもてる日の跡の夕立かけてすしきはいま一しほのなつころも哉

一とをりはれてう雨のすしきは木の間に風のこ敷やふきわたるらん

戀夕

待人をおもひし空をなかむれハ夕てになりぬ今夜うれしき

納涼のおくの御詠一段おもしろく存候、御哥ちからいてきまいらせ候事、きとくにそんし候、行すへたのもしく罷成候、さりながら拙臣、しろしくろしをもそんし候はぬ身上に候へハ、更不可足御信用候、たゝ心にうかみ候趣、らうせきをかへりみす、例の愚筆にすかり候、彌御心をかけわたらせ給ハん事專一候、返々おもしろく存候、よく申給へ、

柳臨池水

春の池のみきはにたてる青柳のうつるりて春の緑の色そ添行

池の面の水のみとりも青柳のいとふきむすふ春の朝風

緑に青、同心候間、

春の池の水きはにたてる青柳のうつれハ波の色もそひ行

兩首尊詠、何もにて候、尊意次第に候間、御取成奉頼候、

海邊松雪

降雪も松のこすゑハ一しほの波色まさりたるしつかなる天のはしたて

珍重存候、

鐘聲何方

入相のかねのひゝきに山ひこのこたふる方もそことしられす

尙被得御意候て可然存候、

郭公遍

うき雲もはらひはてたる空ハ今聲のみしけきそしつけき山ほとゝきす

世ハなへてうれしとそ聞二こゑ一のきかまほしきと山時鳥

雪中鶯

雪のうちになく鶯の聲なくハいかてか春のくるをしまし

あまり古躰候、鶯のこゑなかりせはとちかふ所なく候、無心候、

巖苔

さゝれ石のいく代世をへてか巖とやなりて重ぬる苔衣かな

此御哥、尤神妙也、殊勝也、

代々へぬる程もしられて山きは巖の上の苔そふりぬる

巖苔御哥、近頃可然存候、珍重候、く、

山家嵐

元和七年十二月二十五日

柴の庵幾度ゆめをさますらしよはの嵐の山ふかきこゑ

別而殊勝奉存候、

五月雨

晴まそとみれハそのまゝかきくもり猶雲かゝる五月雨の空

山の端に何ぞ、かゝり物御入候ハぬ歟、

螢 是ハ學問の精に入たる古字にて候まゝ、かやうにハいかゝと存候御ひけ候て可然候歟、

あつめこし窓の螢のよるゝハ光ハ玉となをてらすらん

夜もすから螢飛かふかけみへて澤へをてらすうちの川水

稀戀

蜘蛛のゐのたえぬと見えてかきつくすはかなき戀のたくひならずや

いつもの御詠とハ、面影聊かはりて聞申候、如何候、

鶯是万春友

みとりそふ砌の松ハにうつりてや万代よそふの聲はるかかさねん枝にうくひすそなく

よろつ代を君にかさねて幾春ものとかにきこゆ鶯の聲

廿八日まへにて候へハ、一かう哥共、なにともなり候はす候まゝ、此哥なにともなりとも、
二首の哥御なをし候て給候へく候、なをゝ、此哥二首をなをさせられ候て給候へく候、

草花早

草むらの野への夕かせ分入吹てて中に色めく萩のはつはな

近比ゝおもしろく存候、

こゝにはや秋のしるしをみせそめて草葉色花のそふ萩のしら露

可然存候、

關屋煙

けふりたつ關の一里みえわかて白雲かゝるあふさかの山

多少樓臺烟雨中、おもしろく存候、

あつまにもこえける關のさとゝにけふりにこもるあふさかの山

關守の里一むらみへわかてけふりにこめしあふさかのやま

相さかの關の一むらたえゝにけふりにこめて秋風そ吹

元和七年十二月二十五日

第一の御哥、言語道断しかるへくこそ御入候へ、もしたれくにも内々みせ御入候御事候や、一段と御詠にちから御入候て、ことに御作意のほとも嚴重の物と成申、きとくにこそ存候へのよし申給へ、

逢戀

契り置し日數もけふにくれ竹のなひきあふ夜の窓ハ明る程んかなしき歟なし

えにしあらハかくこそあらめゑもきふの露のなさけの宿りおもへハ

あふ夜の窓とハ、下の心御入候哉、ゑもきふ、是又子細候哉、末つむ心も御入候哉、きとそれも不聞候、如何候、

月照菊花

くもりなき御代の秋とやてる月の光にみかく菊の上の露

此哥、餘分なく候へ共、平臥式候條、御免之、可然様ニ御なをし候て可給候、トシ、

春松契千年

十かへりの花のさかふる春そとや松に千とせの色をにしろしもみすらん

春風も枝をならさぬ君か代に千とせをちきる松のことは

于今不始儀なから、むつかしく候はんすれ共、此兩首いて候て給候へく候、只今待申候得共、御隙入候由、爲其如此候、

菊藥獨盈枝

枝かはずまかきの菊の色にかにひとりことなる花のさかりはかな

ゑたことに咲そふ菊ハこと草もましらぬ花ににほふをける白露

枝ことハ、毎の字にて御座候、こと草ハ、殊なる草にて候、各別の事之由にて候、素然

旅船聞浪

旅衣とまりの舟にたつ波の音さはかしきこよひ成けり

舟にたつ波、つゝきいかゝにて候、

五月雨

空空ハ猶へんいくへの雲の峯こえてなをふりくらす五月雨の頃

池水のみくさなかる、庭の面に波こそすほとかたよるの五月雨の空

池水の水草とも、又候へき哉、

氷室

つきもせぬ高津の宮の水室こそかしこき代々のためしとハなれ

氷室ハ仁之御宇額田皇子より始候、高津ノ□□さかへハ、珍重く也、

夕顔

葉かくれのいとくなを花に色あるゆふかほの露の光をそふる月かけ

花のみか露もをきそふ夕かほのかゝるかきほの月そえならぬ

えならぬなど、わさなかましく候、

梅移袖

盛なる梅の八重はな敷かきのとかにて手折し袖に匂ふ春風

梅の八重かきとも御入候ハん敷、いかゝ御座候ハん哉、

述懐

聞わかぬ御法の道のゆく末をいかにたつねんおろかなるみは

述懐に、ことこそおほく候ハんに、釋教ハ、いかゝ候、來世の願望ハ尤候へ共、公宴の御哥

にハ如何候、可被改候哉、

「禁中花敷」（頭書）此三首〇以上、點者ノ無題、筆ニカ、ル、

おさまれる御代に咲そふ大内の花の色香へなへてのともなしににる時もなし

咲そふる花のさかりハ三吉野、山もおよはし九重の庭

見る人の袖の上より雲の上の花春もハ久しきさかりみすらん

初一念の存分、先書付てまいらせ候、にる時ハなし、業平朝臣花の名哥にて候を、また花に

ハいかゝと存候、おくの御詠、哥から可然候、乍去、見の字二つ候間、如此添刪申候、先刻う

け給候ことく、はれかましき哥にて候まゝ、誰々にも、猶よく御談合候へく候、爲其兩首、

點をかけ候て進候、中のをハ、おかれ候へく候、

海旅

いく里をこえてつくしや旅をすまの浦の舟のとまやに一夜あかしつ

度く御むつかしく候ハんすれ共、たのみく入存候、

「千鳥敷」〇點者ノ筆ニカ、ル、

なにはかた芦まの千鳥鳴たちて村くさむき波の色かな

水鳥に千鳥作例、不審、

難忘戀

元和七年十二月二十五日

年月を日數かさねて契りけるわすれかたしや歟そかたき人の面影
雲霧のかさなる山の忍をひても契りわすれぬ人のおも影

此哥ハ、此國の哥にて候まゝ、御なをし候て給候ハ、御うれしく存候へく候、いつもく御むしんの事申候て、御むつかしく候はんすれ共、御なをし候て給候へく候、二首にてんのかけられ候て、御なをしたのみ入存候、戀の哥、いかにもいてき候ハて、めいわくにそんなし候、

遠嶺雪

おほひえやふもとも山もをしなへて遠くそみゆる嶺の白雪
ふしのねもおもひやられてうちむかふ遠ちかき峯さへ雪そつもれる

寄世祝

松か枝に翹ならへて友つるのいく世もふへき今朝のもろ聲
此哥ハ、寄羈祝になり候はん哉、いかゝ、御らんせられ候て可給候、以上、
大ひえふもと山嶺、あまり山類おほく御入候歟、今ちと御思案候て、御稽古の義候まゝ、
親王御方へ御めにかけられ候てよく御入候、以上、

十五夜月

名にめてし雲霧もなくのひまより月さへて秋ゆるをこほらすこよひ成けり
こむよまてまちにし今の駒とめて月にみへ行逢さかの關
八月十五夜駒迎の事ハ歴然候得共、いさゝか月の心を隔候歟、駒迎のと申題候ゆへ候、ハ
しめの御詠可然存候由申給へ、

晴季

重陽詠菊送多穠和哥

幾秋かめぐり逢へきしら菊の千世をかさせる九重の庭
哥からハ、端なを可然候、但露送多秋ともあるへき御哥にて候まゝ、これをかきつけ申候、

田邊柳

枝かはす柳乃下の小田のはらみとり立そひなひく春風
のとかにも春の山田の柳かけみとりにうつむふるさとの路

寄鴛戀

をし鳥の翹つらねて池つれなくもわかみひとりの面にはなれもやらて戀渡るらん
池の面にせく白波つかぬをしをみるからに涙ことはるわかおもひかなにし鳥のなく音にあまる涙なりけり

此哥、いかゝ御座候はん哉、御むつかしなから、御なをしなされ候て可給候、猶以面上申

元和七年十二月二十五日

候、いし、

難逢戀

こひくゝて忍ひかねたるよひの間ハ人めはかりにあふこともなし
かよふともしられぬ程をうらみにてたゝあひかたき忍ひねの門
執々殊勝候、端の御詠、咲しにて候やらん、忍ひねの門、作例候歟、不審候、たとへ古哥に一
首なと候とも、かやうの詞なとハ、御幼少の時は無用候歟、

十五夜月

かけきよく天のけふのこよひのとわたる月さへて秋のも中の名にハかくれす

秋祝

いく秋のかきりハ君やかそへみんおさまる世れとやすめる月日を

鶯

ふる雪の砌なからも世は春と心のけきとかにうくひすの聲

岡篠

松杉のたてる山路やいかならん夕さひしきおかのさゝはら

歸鴈知春

さほ姫の雲の衣をかりかねの春ハつはさにたちかさぬらし
久かたの雲の上よりのとかなる時をわすれすかへるかりかね
何も可然存候、各里村紹巴などにみせられ候やうに申候間、内々みせ下され候て可然存候よ
し申給へ、

晴季

菊送多秋

いく秋をおくりむかへて庭の面の菊のまかきに匂ふしら露
幾秋かめぐり逢へき白露の千世をかさせる九重の庭
ちる花の匂ひをのこす風もかな

色かへぬ松にふちさく朝かな

「行幸歟」(頭書)此十四首〇以上、點者ノ無題、筆ニカ、ル、

かきりなきすへもしられて此宿にちきる行幸そ代々にこえぬる
御幸せしわかうれしさの心をはことのはことにいひもつくさし
かけまくもかしこき世とやふる雨もはれてみゆきを空のかへるさの空に知らん

元和七年十二月二十五日

元和七年十二月二十五日

四一〇

雨までも君かめくみになひきて庭の梢もふかみとりかな
つゝむにもあまり有けるうれしさや百の司のそでのいろく
歸るさの名残をおもふもろ人の□ちつゝきたる袖の色く

二首、先此分可然候、第一玉と御入候御返哥御案候て可然候哉、如何候、○寄玉祝ノ批
點ニカ、ル、

「寄玉祝敷」○點者ノ筆
ニカ、ル、

時しあれハ名にあらハれてくもりなき玉の光や世にあふくらん
此御代ハさらにくもらぬ玉なれハもろこしまてのひかりとそおもふ

「禁中花敷」○點者ノ筆
ニカ、ル、

おさまれる御代に咲そふ大内の春のとかなる花の木の本
咲そふる花のさかりハみよしの、山もおよはし九重の庭
わきてしも雲井の庭ハ長閑なる花の色かやいく千世の春
みる人の袖の色より
いく春もさかり久しき雲の上の花にみかける庭の木の本
幾年か雲井になる、春の日にさかりしつけき花の木の本

「七夕橋敷」○點者ノ筆
ニカ、ル、

天河としに一夜のわたりにはまたき紅葉の橋やかくらん

松上霞

長閑なる世ハすみの江の松に吹風おさまりて霞む空哉

いく春のかけなを高し松か枝のみとりにかすみ立かさぬらん

七夕言志

いく年もあふせはたえし天の川けふの手むけのやまとことのは
うれしさも雲の衣にあまらましけふのこよひのほしの契りハ

おくの哥、おもしろく存候、雲の衣にあまると候事、いかゝに候、袖にあまるとハ申候、衣
にあまるとハ、作例候ハ、中々可然存候、さりなから、うれしさをなにつゝまんから衣
たゝましものを袂ゆたかにとよみ候まゝ、つゝむとあまるとの心にてハ、おしむと存候、
但尊意次第候、○邦房親王御詠、コノ
外千四百首ヲ略ス、

〔古今夷曲集〕

九 雜下付哀傷
もなかりければよめる、

邦房親王

いさめても犬よりおとる人ならば見ざるきかざる言ざるがよい

元和七年十二月二十五日

四一一

御狂歌

元和七年十二月二十五日

〔琵琶作法口傳聞書〕

家○伏見所藏

●琵琶所々名

轉手アシユ 海老尾カイラウビ 柱シユ 乘絃チヨゲン 甲クヒ 復ハラ 遠山トヲヤマ 礮イッ 半月ハンゲツ 覆手フクシユ 撥面バチメン 隱月インゲツ 落帶ラクタイ 猪目イノメ
撥ハチ 絃藏ケンザウ 頸クヒスチ

ワウ・平調之調

似レクヲ平調爲レ宮、コクト同音、乙ト上同音、一トク同音、エ下下上七下八盤九一双一双一神フ鼻乙斷ミ鼻ム上斗一コ勝一之黃也一

●ハナシヲ

一平乙盤ク平上黃

ヒ・盤涉之調

似レ乙盤涉ノ爲レ宮コクト同音、乙ト上同音、七ト一同音、エ鼻下上七下八盤九一黃一十一一ヒ一双一神フ鸞乙斷ミ鼻ム上斗一盤一コ平一之黃也一

●ハナシヲ

一下乙盤ク平上黃

フウ・黃鐘之調

似レ上黃鐘爲レ宮、乙ト上同音、乙トク同音、一上同音、エ盤下一七下八盤九一神十斷一ヒ一双一神フ上乙平ミ鼻ム上斗一コ勝一之黃也一

●ハナシヲ

一黃乙神ク平上黃

ソウ・壹越之調

似レ乙壹越爲レ宮乙ト也同音、乙ト上同音、一上同音、エ盤下一平七下八盤九一神十勝一ヒ一双一神フ上乙下ミ鼻ム上斗一コ双一之黃也一

●ハナシヲ

一黃乙一ク平上黃

ヘン 雙調

以レ上ヲ双調爲レ宮、乙ト上同音、一上同音、クコ同音、エ黃下盤七平八黃九鸞十神一勝一——鸞盤乙上ミ下ム盤斗神コ黃乙双也神

●ハナシヲ

元和七年十二月二十五日

一 双乙黄平黄上双

●音取之次第

一番笙、二ニ篳篥、三ニ笛、四番琵琶、七撥、七撥ハ音頭ノ比巴引ハカリ樂ノ始ニスル、亦五ト箏、樂ノヲサマル時亦音頭ハカリ七撥スルナリ、

●調子管撥合付次第

一番笙、二ニ篳篥、三ニ笛、四番ニ琵琶撥合スルナリ、數面アリテモ、一手ツ、ヲメルハ音頭セ又人ノ比巴ナリ、音頭ヨリハヤクヲク、

管ノ音頭ノ吹ヲハル時、四絃ノ音頭ハカリ七撥スルナリ、又管ノ調子ニ撥合タラヌ時ハ、

亦口返テ引也、トコナリトモ管ノヤム所ニテ、撥合ヲヲキテ七撥スルナリ、

樂時ノ●琵琶音頭之次第但比巴ノ音頭ノ習也

一番笛、二笙、三篳篥、四琵琶、五箏、

篳篥吹タラハ、モシ比巴手前ワスレ候トモ、マツ何様ニモ引也、サテ琴ニ付サスル也、箏

ヨリアトニ、ワスレテモ、比巴付ル事無、一切口傳、秘密々々、

●琵琶音頭ノ外ノ者付次第

琵琶付ハ、數面ナリトモ、次第ノニ付ル也、音頭セヌ比巴ハ箏ノアトサキ也、

●殘樂之事

殘樂セヌ比巴ヒキハ、諸絃諸管、殘樂セヌ者ト一度ニ置也、殘樂ヒク者ノ比巴ハ、殘樂ス

ル篳篥吹ノキテカラ、一手ニテモ置也、上手ノ比巴引ハ、興ニシタカヒテハ、箏ノ一手

二手殘シテモヒク也、

●殘樂之事

琵琶之音頭セヌ者ノ殘樂スル時ハ、音頭ノ比巴ニ付テ殘樂スル也、其折ハ、音頭ノ比巴ハ

ヤク置也、

●殘樂ハ音頭ニカマハス、老若ニカマハス、上手ノ引事ナリ、

●太平樂急殘樂之事

五反ノ時ハ、常ノコトク口二反中二反喚頭二反、口一反中二反喚頭二反、口一反中二反、

反喚頭二反、口一反中二反喚頭二反、口一反中二反、

●千反樂之作法

七撥ナリ、五常樂急始ハ、如常琵琶ヲ付テ後ニ、休テカラ又引時ハ、何れも音頭ト一度ニ付

ルナリ、千反滿ノ太平樂急アルト、羯鼓・太鼓・鉦鼓、太平樂急迄ニアリ、

右一冊、琵琶作法口傳聞書、中務卿郡冠房親王ヨリ傳受者也、門外不出、不可他家へ出者也、

兵部卿貞清親王

筆庸令書寫之畢、

御疾病

〔玄朔道三配劑錄〕

天正十七年夏、^{（飛塵）}伏見殿中務卿^{（親王）}傷寒、初三日祐乘坊、次三日驢庵、次三日竹田定加法

印、既望八日而發熱不止、舌焦黑唇裂、謔言撮空、大便五日不通、諸醫皆辭而退、予與大柴胡三貼、而黑糞數丸出、而謔言止、次與小柴胡加減、而三日而精神漸宜、十日而余惺々、

御一周忌

〔鹿苑日錄〕

六十 元和八年十二月十七日、赴伏見殿齋、桂昌院尊儀一周忌也、

廿三日、○中略 自伏見殿先日廿七日施餓鬼齋施物來、十夕也、十疋燒香之加也、

〔鹿苑日錄〕

六十 元和九年十一月十六日、○中略、日野唯心百箇日ノコトニカ 初更時分

御三周忌

（承夜） 仁英、（宗題） 齋叔來臨、來廿五日、於心華院、伏見殿爲皇考桂昌院設齋、求予以拈香、急速無餘日、固辭再三、雖然伏見殿堅請故領之、蓋第三年之忌也、

廿五日、昨日風雪今朝快晴、爲拈香法會喜之、於浴室着法衣、行智壽恩持法蓋、行者聽叫持平衣袈裟、小聽叫持金扇帽子、到心華院、（承堂） 鳳林西堂門迎、於玄關接予、到庭之正面、而上西之北間、伏見殿居簾中故、大衆立東、拈香、予到西方而立、鳳林出、鳳林到、則拈香、予到東方東堂前、而小問訊、東堂多、則到頭東堂問訊、以其問訊到末東堂、今日一山故、（禮供） 東堂有節一人也、故向一員東堂而問訊、則到中央、向本尊而立、則普同問訊、燒香侍者以大香合之蓋擊香、予取香、唱拈香

御七周忌

〔鹿苑日錄〕

六十 寬永四年十一月廿五日、桂昌院七周忌、就伏見殿有懺法而赴矣、

〔京都府寺志稿〕

四十二上 相國寺上 伏見宮御墓 塔頭心華院ハ伏見宮御菩提所ニ

シテ、御墓ハ同院ノ墓地ニ在リ、伏見宮ノ御墓ハ故伏見ニ在リシカ、中ヨリ此ニ埋葬スルトナリ、爾來ハ世代（三十七）代、御家族（三十七）人ノ御墓アリ、其御世代ノ分ハ左ノ如シ、○中略

〔陵墓要覽〕

九 後伏見天皇

十世皇孫邦房親王墓 （伏見宮） 京都府京都市上京區相國寺門前町 相國寺内伏見宮墓地

五輪塔 桂昌院

法語、々々了、則到本尊前插香、本之沈香也、然到檀那前燒香、々々了、則出緣脫法衣、着平衣而到、半齋始、半齋燒香拈香勤之、予上方、殊檀那之意在予故、固辭而不讓、門中之衆勤之、半齋了、則檀那燒香、然齋、盛坐牌而就座、接入鳳林西堂勤之、主位拈香、予雖爲上方、坐牌以拈香出之、賓位慈照和尚、（有僧攝受） 主對蘭秀西堂、賓對鳳林西堂、接入自東堂到西堂、在下間接之、到平僧、立上間接入、

廿六日、仁英齋叔來、携嚙金青銅五貫文也、拈香之時者、燒香侍者拈香十分一施物、古往今來法度也、今度不攀其例、常僧之分也、○下略

九 邦房親王 （貞康親王子、號桂昌院宮、壽不詳、實埋不詳、

元和七年十二月二十五日

四一八

薩摩鹿兒島城主島津家久・豊前小倉城主細川忠利、世子家光ニ、歳暮ノ賀儀ヲ呈ス、

島津家久

〔後編舊記雜錄〕

七十

家久壽歲晚而獻上使幣、乃賜台書矣、

家光内書ヲ以テ家久ニ答フ

正文在文庫三番箱中ニ在リ

為歳暮之嘉祥、小袖十被相贈之、恟意之至、欣然此事候、委曲酒井雅樂頭可申候、謹言、

朱子キ

元和七年

十二月廿五日

家光判

薩摩

宰相殿○島津國史、異事ナキヲ以テ略ス、

細川忠利

〔細川家記〕

二十一

一十二月廿五日、

若君様（家光）

御小袖被指上候、付而之御奉書、并小篠

次大夫仁保太兵衛淺山清右衛門（極月廿五日附、小篠次大夫等宛、忠利書狀ハ略ス、本月十四日ノ條ニ收ム、

若君様（家光）ニ為歳暮之御祝儀、御小袖三之内薄織染物、綾御進上、則致披露候之處、御祝着之旨相意得可申入之趣、御意御坐候、恐々謹言、

十二月廿五日

青山伯耆守（忠後）

酒井備後守（忠利）

細川内記様人々御中（忠利）

二十六日、巳幕府、金地院崇傳（極月）心ニ、米三百俵ヲ與フ、

〔本光國師日記〕 三十一 同廿六日、上様八木拜領之御年寄衆手形來、案在左、

八木三百俵金地院へ被遣候間、内衆手形を取、可被相渡候、以上、

酉歲

永信濃印（永井尚政）

十二月廿六日

井主計印（井上正統）

士大炊印（土井利勝）

本上野印（本多正純）

酒雅樂印（酒井忠世）

淺草

御藏衆

此手形、如折紙、奉書ヲ二折ニ書之、大橋長左衛門筆也、

一同廿七日、井主計殿（極月）方淺草御藏衆名書付來ル、淺草御藏衆萩原五左衛門、窪田小兵へ、大田

又右衛門・田邊清右衛門、以上四人、

一米請取狀、此方御藏衆へ遣、案在左、

請取申米之事

元和七年十二月二十六日

四一九

淺草御藏衆

元和七年十二月二十六日

合三百俵、但三斗五升入、

右是ハ、御年寄衆以御添狀、金地院被下者也、仍如件、

元和七年

金地院内

西十二月廿七日

淺草御藏衆

〔ム古語〕

一 同七年極月廿六日、八木三百俵拜領、

是ヨリ先、伊勢安濃津城主藤堂高虎、京都ニ在リ、是日、江戸ニ參觀ス、

〔時慶卿記〕

五十 十月廿二日、天晴、前宵ハ雨也、晚ハ風寒、略中 一藤堂和泉守へ遣狀、

同名壹岐守ニ言傳候、御茶ノ事申候、略中

十一月六日、天晴、略中 藤堂和泉使者鷹ノ羈進上也、竹井主水正祐言傳也、予狀モ言傳候、

出盃、酒ヲ飲合、略中

十二月四日、天晴、曙ニ雪散、略中 一藤堂和泉ヨリ蠟燭百挺入箱一、諸白大樽一斗五升入一

ツ給、略中 一藤堂和泉ノ使同名勘解由ト、略中

五日、天晴、時々雪霰散、略中 一藤堂和泉守同銘勘解由宿へ行、單皮三足遣候、菱屋忠左衛

門所也、取持テ酒ヲ出、馳走候、略中

高虎鶴ヲ西
洞院時慶ニ
贈ル

三宅亡羊

高虎京都ヲ
發ス

義宣使ヲ京
都ニ遣シテ
吳服ヲ調ヘ
シム

四二〇

元和七年十二月二十八日

四二一

十一日、天晴、寒替也、略中 一於女院御所、寄齋謁藤堂和泉守、無事之由ヲ聞、略中

十六日、雪散、天晴、陰、日出、略中 一陽明ヨリ藤堂和泉守へ御書ヲ給、一勘局ヨリ一分ヲ

二ツ給、一端ヨリ百疋、内義ヨリ沓五疋送、但泉州江戸へ今日被立由、陽明ヨリ被仰、忠左

衛門宿ニモ此説アリ、仍トヲ養首へ尋ニ遣候、略中

〔梅津政景日記〕

十 極月廿七日、略中 一藤遠い、つみ殿昨日御國ハ御出之由御使有、就

之爲御音信白鳥三ツ、鹽引貳拾本被進候、御使ニ持參致候、一天氣能、略中 寛政重修諸家譜藤

二十八日、出羽久保田城主佐竹義宣、幕府ニ歳暮ヲ賀ス、

〔梅津政景日記〕

十 十月廿九日、略中 一森田傳五所ハ御内書有、様子ハ、歳暮之御服

之御用ニ、川井理左衛門申付爲上可申由御書付有、銀ハ御藏ハ取出し入候ほと積候て指越

申候へと被仰下候、一御下風呂如定立、一天氣よし、

同六日、略中 一川井理左衛門御走薄井角兵へ歳暮之御服の御用ニ、京都へ罷上ニ付、御前

ハ銀子十六貫目半丞ニ爲渡申候、一天氣よし、

霜月七日、略中 一歳暮御服之爲御用、川井理左衛門御馬添薄井角兵へ、今日京へ爲上申候、

略中 一天氣よし、

同十四日、略中 一川井理左衛門歳暮ノ御服持罷下候、御買物ノ内、山口惣左衛門分指上候

元和七年十二月二十八日

四二二

徳川忠長

分、地むきも能候由御意被成候、一天氣吉、
極月廿八日、一爲御禮御本丸(家光)新城(忠長)二ノ丸へ御登城被成候、御供いたし候、略○下

○佐竹義宣・金地院崇傳等、歳暮祝儀贈答ノコト、便宜左ニ合致ス、

宇都宮義綱

〔梅津政景日記〕

十(梅月) 同十一日、○中

一天氣よし、一字都宮彌三郎様へ如毎年銀子

藤堂高虎

貳十枚御小袖壹重被進候、太野金右衛門御使ニ越差申候、○下

極月廿九日、一歳暮之爲御使、藤堂(高虎)和泉殿へ御小袖五ツ被進候、持參申候、即御返事有、一

我等爲歳暮太炊殿内寺田與左衛門、太野仁兵へ所へ使指越申候、道三法印・道琢所へも、右之

様子ニ候、一天氣よし、

同晦日、○中

一以柏次兵衛殿へ歳暮之御祝儀進上至候、何も御禮狀有、○中

一天氣吉、

島田重次
同利正
金地院崇傳

〔本光國師日記〕

三十

一(梅月) 同十一日、

端下着、八兵衛庄介も下ル、久右衛門十一月廿九日

之狀來、下物共、

一染小袖、小性共、五ツ 一はかま、かたきぬ十人分 一上々之とんす三卷 一中ノとん

す十卷 一杉はら三束 一餅米極白廿二俵 一諸白八樽新酒、一みそれノはせ小樽

一ツ三升入 一こんふ百本 一白はし三百膳 一(イ)

以上

右之分下ル、慥ニうけ取也、

良長(元良)老霜月廿八日之狀來、崇壽院様十一月十八日之御文來、略○中

一極月十二日、八兵衛庄介返上ス、久右衛門へ返書遣ス、十二日之日付也、崇壽院様へ御返

事遣ス、十一日之日付也、歳暮之御祝儀ニ小袖二銀二まい進候、妙玄へも小袖一ツ遣ス、

右進上申候へと、久右衛門方へ申遣ス、板伊賀殿へ狀遣ス、極十五日之日付也、歳暮之祝儀

ニ八尾餅五十入之桶二諸白兩樽、昆布一臺進候也、久右衛門持參候へと申付ル、又來年之

日取之書一冊上ス、周防殿へも右伊州へ之同前也、勿論日取之書も上ス、○中 大寧院へも

返書遣ス、略○中 上池院(坂宗忠)京之宿へ之文、并紙袋こもつゝみ則上ス、上池院京之宿へ小判九

兩慥ニ相渡候様こと、久右衛門方へ懇ニ追而狀こも又申遣ス、此時清五郎を上ス、

一極月十六日、南禪常住之飛脚與七下ル、十二月五日之連署來ル、歳暮之祝儀ニ銀子二枚來、

正因庵極月三日之狀來、銀一兩來、大寧極月五日之狀來、木毬來ル、求西堂五日之狀來、黃

鸚來、此時久右衛門極月五日之狀來、崇壽院殿十二月四日之御文來、七極五日之狀來、稻葉

喜六殿國元と十一月十二日之狀來、みかん千來由也、久右衛門下物共、

一杉はら二帖 一筆六双 一すみ二丁 一木綿たひ二足 一わたほうし一ツ 一帯

二筋 一こんふ五十本 一梅ほうし五百 一玉一つゝみ 一かわたひ一足 一まく

元和七年十二月二十八日

四二三

元和七年十二月二十八日

四二四

らかけ一つ 一たふ一つ少、以上、右之道具下ル、慥こうけ取也、山崎や九兵へ御頭巾一つ下ル、

一同十七日、常住之飛脚與七を上ス、連署之返書遣ス、銀葉二片之禮申遣ス、正因庵へも返書遣ス、大寧院へも返書遣ス、慈聖院へも返書遣ス、何も歳暮之祝儀申遣ス、久右衛門へも返書遣ス、下物何もうけ取候由申遣ス、崇壽院様へも返事遣ス、是ハ十四日之日付也、

靈圭

一同十九日、勝仙院霜月廿五日之狀來、歳暮之祝儀之數寄たひ三足來、則返書遣ス、

一同日、圭長老極月十八日之狀來、歳暮之祝儀之扇子二本、銀子六匁、木毬來、是ハ内記殿へ參候、わさとの使也、太八下ル、

一同廿九日、藏福下ル、久右衛門極月十八日之狀來、良長老十八日之狀來、久右衛門へ下物共、御着小袖貳、一法華經三部、一金剛經三部、一かや油一樽、一白炭一箱少下ル、

略○中 崇壽院様十二月十七日之文來ル、湯かた一つ來ル、妙玄へ手拭きぬのいと來ル、

一同晦日、立花左近殿へ十一月十五日之狀來、并爲歳暮祝儀小袖二來ル、留守居名ハ石合宗右衛門ト云、山田才兵衛ト云、兩人當地之るす也、是へハ星野長左へと申仁右之狀持參也、則返書遣ス、御音信忝と申遣ス、

大日本史料 第十二編之三十九終

立花宗茂崇傳ニ小袖ヲ贈ル

補遺

元和七年

○十二月十三日、攝津味舌ノ織田有樂、長益、山城東山ニ卒スノ條、一三九頁、織田有樂畫像ノ次、

〔織田有樂畫像〕

○上田宗福氏所藏

原寸

縦〇・九
横〇・四〇



正傳院殿如菴有樂大居士之肖像

這翁匪菅龍蛇陣、心膽常傾趙老禪、一啜松風與團扇、無端掃盡世塵緣、因

補遺 第十二編之三十九

補遺 第十二編之三十九

元和第八^{壬戌} 稔小春上浣

玉室宗珀ノ
贊

前大德玉室叟宗珀



○同條、一四二頁、
保阪潤治氏所藏文書ノ次、

〔上田宗福氏所藏文書〕

以上、

昨日者玄端方迄預示候、御懇勸之至候、今晝之儀必參候而可申候、爲御禮如此候、恐々謹言、

五月廿日

有樂(花押)

宗頓老硯下

有樂

○同條、一四五頁、
青木錄次郎氏所藏文書ノ次、

〔上田宗福氏所藏文書〕

以上、

來廿三日四日之朝晝之内於御隙之ハ、一服申度候、御同心之候ハ、大輪大進可被召連候、恐々謹言、

十月十九日

有樂(花押)

如庵

本國寺^(目想)上人様御中

有樂

本國寺日桓

○同條、一四六頁、
谷信一氏所藏文書ノ次、

〔上田宗福氏所藏文書〕

今朝者早々御狀忝候、嶋清左ハ其方へはや御越候哉、^(從入間正勝)不干より御左右者無御座候哉、時分能候者御供可申候、恐々謹言、

極月四日

有樂(花押)

如庵

^(蜂須賀至鎮)
姿阿波守殿人々御中

有樂

蜂須賀至鎮

補遺 第十二編之三十九

大日本史料 第十二編之三十九

昭和三十三年一月十日發行

〔豫約價 八百圓〕

編纂者 東京大學史料編纂所

發行者 東京大學

印刷者 株式會社 精興社
山田一雄

發賣所 財團東京大學出版會

振替口座 東京五九九六四番
電話小石川(92)八八一四番

コロタイプ印刷 株式會社 大塚巧藝社
製 本 株式會社 松岳社

著作
權
所
有

